

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第 31 号 2003 年 1 月 8 日 (水) 発行：歴史資料ネットワーク (神戸大学文学部内)



講演者と市民が交流を深めたワインパーティー (2002 年 11 月 10 日撮影、園田学園女子大学にて)

目 次

巻頭言

1 月 17 日を前にして 奥村 弘... 2

特集 第三回震災復興市民歴史講座
 「市民と深める阪神間の江戸時代史」開催
 大国正美... 3
 第三回 震災復興市民歴史講座参加記
 (高田耕三・谷川やす子・三原照雅・山本喜與
 士・谷田寿郎・富田允雄・島原典子)
 ... 4 ~ 9

関連団体・会員からの情報
 大阪歴史学会現地見学検討会 ... 10

神戸大学史学研究会例会 三村昌司... 10
 神戸史学会賞は、三木市宝蔵文書調査会に
 大国正美... 11
 「八上城縦走」レポート 川浪史雄... 12
 「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」開催
 される 辻川 敦... 13

各研究会情報
 中世：兵庫津研究会サブ学習会 藤田明良... 16
 近世：西摂研究会 中村光夫... 16
 近代：神戸都市史研究会 河島 真... 17
 文献情報 ... 18
 活動日誌 ... 19



1月17日を前にして

歴史資料ネットワーク代表委員 奥村 弘

新年明けましておめでとうございます。史料ネットワークも改組から7ヶ月を迎え、なんとか事務局の体制を維持しながら、3回の市民講座を行い、被災史料の整理事業を進展させてきました。

未整理の被災史料は、保存状況の悪いものが多いのですが、この間京阪神の大学院生が主体となって、地道なボランティアによる整理を重ねています。岡山大学からも参加者があるなど、参加者の枠組みも広がっています。

市民講座後、交流を深めるワインパーティーもやっと軌道に乗り始めました。講座に参加された方々と主催者や講師が、楽しげに談笑する姿があたりまえのようになってきました。自治体や大学主催の講座とは、異なる市民講座のあり方の模索はまだまだ続いていますが、新しいあり方がようやく見えるようになってきたと考えております。本号の第三回の市民講座の特集をご覧ください。

今年は、春に第四回の市民講座を、神戸大空襲をメインのテーマとして開催する予定です。体験をどう次の世代に引き継ぐのか。これは阪神・淡路大震災にも共通する課題でもあると考えています。詳細は、ホームページおよび次号のニュースレターでお知らせ致します。ぜひ参加のほどよろしくをお願いします。

被災地での新たな市民による企画として注目されるものとして、2002年11月28日から12月1日まで、尼崎市富松地区で行われた「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」があります。これは地元の方々を中心に、歴史研究者、自治体職員が共同しておこなった展示企画です。4日間で700名に近い方々が展示を見に来られ、成功裏に終了しましたが、その準備にかける地元の熱気に、史料ネットから参加したメンバーも圧倒されていました。

さらに被災地の歴史研究についても、史料ネットの会員のイニシアティブのもと、兵庫津研究会や西摂研究会、神戸都市史研究会など幅広く開催されています。史料ネットとしては、市民講座や様々な企画として、研究会の成果を広く公開していきたいと考えております。

様々な事業はなんとか軌道に乗りつつありますが、会員・サポータの拡大の方は、目標の400名の半分程度に止まっています。昨年日本史研究会の大会の際、震度5弱の地震が、宮城県や大分県で起こったことを紹介しながら、地震への対策が重要なことを訴えました。被災地でも、被災地だからでしょうか、何となく大地震はこないという雰囲気があります。しかしかならず、しかも突然に、地震はやってきます。地震に対応する体制をつくっていくこと、このこともまた重要な事項だと考えております。1月17日を前にして、あらためて史料ネットワークへの参加を様々な方々に訴えていただけるようお願いいたします。

(おくむら・ひろし/神戸大学助教授)

第3回震災復興市民講座「市民と深める阪神間の江戸時代史」

大 国 正 美

震災復興市民講座の第3弾「市民と深める阪神間の江戸時代史」が、2002年11月10日、尼崎市の園田学園女子大学で開催された。今回は、史料保存や解読に関心を持っている市民とともに歴史を考えていこうという史料ネット改組の趣旨に沿って、市民の間に芽生えている「古文書を読む会」などに横のつながりを持たせることを、主眼のひとつにすえた。

講演は、京都橘女子大学の横田冬彦教授にお願いした。横田氏は、伊丹郷町の惣宿老・八尾八左衛門の日記から、江戸時代の町人の日常の読書を追いかけて、貸本と購入によって蔵書が形成されていくこと、書物屋の間で競争が起きていること、知人間で相互貸借などが行われていることなどを示した上で、個人的な読本機を持っていて、黙読していること、それは集団による音読から個人による黙読への変化を背景にしており、自省的な読書が行われていると評価した。また、講談、講釈なども頻繁に行われており、これらは「共同的読書」といえるとした。

さらに「大学」の講習が毎月三回行われるなど、郷町の文化水準は高かったが、必ずしも郷町だけでなく、庄屋など村役人層、在村医師、寺僧・神主、寺子屋師匠など、文化の星雲状の広がりがあったこと、それらが芭蕉などの師匠の遍歴を可能にする条件になっていたとし、江戸時代の文化が町人だけでなく農村や地方もその基盤になっていたとして再考の必要性を強調した。

続いて震災で救出された伊丹・南野村の在村医師・笹山家の蔵書目録を、河内地方の庄屋や在郷商人の目録と比較し、蔵書が多様であること、享保期には一般の読書家にも医学

書などが多く含まれていたが、以降は職業的な専門家が成立していくとした。また古典が多く含まれていることを指摘し、近世は古典が広く読まれるようになった時代で、古典を書かれた時代の作品として評価するだけでなく、読む側の視点で見直し、それを通じて文化史の視点の転換が重要と締めくくった。

続く関西大学の木村修二氏と、伊丹市酒造家史料調査員の石川道子氏が、宝塚・伊丹・西宮・宝塚市西谷・池田・尼崎で展開される古文書を読む会と、荒木村重研究会、伊丹市立博物館友の会の活動などを報告、会場からの声を交えて討論を行った。



参加は記録されただけで105人と、人数は目標を達した。参加者のアンケートは半分弱の40人分しか回収できなかったが、回収した範囲では好評だった。横田氏の講演に対しては「新鮮だった」「下層民衆の生活程度を知りたい」「遊びや民間信仰など文化面の研究を」という感想があった。サブ報告では、「古文書を読む会の事例を持ち寄る機会が欲しい」「今後各会の成果を持ち寄って集大成する機会を設けてほしい」と、さらに踏み込んだ報告会を求める声もあった。

振り返ってみて、内容に関しては、古文書を読む会を一同に集める初めての機会としてやることに重きを置いた。その点では、尼崎のグループが作成した古絵図復元について、ほかのグループが取り組んでみようという動きが出たり、また活動をまとめた古文書翻刻集出版を考えているなど、早くも団体間で刺激が始まったという点で所期の目的は果たしたと思っている。ただ横田氏の講演とサブ報告はつなぎ方をもう少し検討すべきだったという反省は残った。事務方としては、準備期間の短さや、当日の受付の人数不足、チラシ

の内容のチェックが甘かったことなども反省点として残った。ただ、準備段階から各グループを巻き込んだため、終了後のワインパーティーにも比較的多人数の参加があったことや、古文書を読む会の成果を持ち合う会の必要性を訴える声があったことは、今後につながる成果として記憶にとどめたい。

星雲状に広がる市民の活動を結び、邂逅することにより新たな成果を生む試みは始まったばかり。息の長い取り組みが求められよう。

(おおくに・まさみ/史料ネット運営委員)

<< 第三回震災復興市民歴史講座参加記

第3回震災復興市民歴史講座に参加して

高田 耕三

11月10日、市民歴史講座が園田学園女子大学で開講され、運営委員の大国正美氏の熱心なお誘いにより参加しました。定年後古文書の解読を習い始めた者の感想であることをお断りし、以下私なりの概要と感想を記します。

横田冬彦氏の講演「江戸時代の書物と読書」からは、文化活動のさまざまな広がりや改めを知りました。例えば郷学・私塾・寺子屋が生まれ、俳諧師匠たちだけでなく、在郷商人層、庄屋等の村役人層、医師、寺僧・神主がネットワークを形成していること。読書サークルができ、師匠たちの遍歴を可能にしたこと。たとえば芭蕉の紀行には下郷家、西鶴には三田家、契沖には伏屋家など、文化の担い手の師匠たちを支えた「星雲状の文化の広がり」があったことに目を開かされました。また伊丹郷町近くの南野村在村医笹山家の蔵書目録から、その多様性に加えて、医学書や世界地図など科学的な蔵書を多く持っていたことに興味を引かれました。

また横田氏は、伊丹郷町惣宿老で酒造株高1214石だった八尾八左衛門（屋号・紙屋）の日記から、古典が一般庶民にも読まれたことを詳細に説明されました。江戸時代は古典が古典として確立し、日本の文化が一般庶民に

根付いた時代であったことも、印象に残った指摘でした。このほか、本屋との間で古本の売買が行われたり、大学・論語の講演会、いわばサークルが開催され、医学書の読書など幅広い読書内容と質の高さを知ることができたことも収穫でした。

サブ報告では、木村修二氏・石川道子氏による阪神間の市民中心の主な古文書を読む会・研究会のサークルの紹介、現状について概況報告が行われました。会場には、各サークルの成果の展示、出版物の販売があり、市民の歴史研究活動の力強さを感じました。



中在家町並み絵図の復元についてはその熱い思いを語られ、荒木村重研究会では村重への熱弁を聞き、先人や故郷に限りない愛情を感じました。私は宝塚の古文書を読む会と、岡本家大庄屋日記研究会に参加しています。西宮瓦林組の大庄屋、岡本陳僖氏が行政の多くを担い、勿論藩からの指令に基づくものとはいえ、如何に村人のため日々を費やしてい

たか、その多忙さと高等小使いぶりに感心しているところです。

(たかた・こうぞう
/岡本家大庄屋日記研究会・宝塚の古文書を読む会)

伊丹・惣宿老の読書記録から
第3回市民講座に参加して

谷川やす子

電話やF a x、Eメールなどで注文してしまう時代である。取引される物品は羽が生えてどこからか飛んでくるわけでもなく、生産業者に成り代わって配送業者が宅配するご時世。お陰で手間と時間が節約出来るのは有り難いのだが。

業者は輸送中に何らかの事故による損傷を起こさないよう細心の注意を払うが、それ以外は何が起こっているのか見もしない。傷つけ、変質、変形させてしまっていることは専ら保険で処理する。かと思うとあまりに注意しすぎて過剰な包装に頼ったり、今日中に欲しかった物が翌日回しになったり、留守中に持ち込まれたり、また注文した商品が予定より早く来てしまって部屋に邪魔になったり、と細かい行き違いは往々にして起きる。

以前、金魚を輸送するのに金魚を仮死状態にし、冷凍して航空便で輸送するという話を聞いた。高級な魚介類、海老や蟹もその方法が採られているようで、輸送そのものの技術は格段に高くなったのにどこか行き届かない。

さて260～280年前の伊丹郷町のトップ、惣宿老・八尾八左衛門。多忙で専門分野以外の本など手にする暇もないのではと思いきや、実に多種類、内容豊富な書物を多数読破し、且つ日記などに記録していたと言うのだ。むしろ専門書が少ないのはこの時代の限界かも知れない。任務のある身で「奇偶の日課相定」(享保20年12月15日)ということは奇数日は仕事関係、偶数日は寸暇を惜しんで読書三昧ということか。まあ所用の続き具合のためか例外もあるが羨ましい。それにしてもいかに新しい知識を求めていたか、その並々ならぬ意欲は時に日記をして「面白」を

記さしめる。

もう一つ。

彼の知職欲を支えていたのは他ならぬこの時の本屋、何軒かあったとされるが、単に本の売買だけで終わらない関係がよい。

本屋と惣宿老は

注文を貰ったA本を宅配する

A本の感想を聞く

別のB、C本の評判を伝える

惣宿老と本屋は

A本を届けてもらう

A本の読後感を述べる

B、C本の評判を聞く

これらのことがすべて直接手から手へとやり取りされていったということだろう。

当時の本屋が店を構え、且つ、御用聞きよろしく注文をとり、カタログに換わるべき情報をもって、読書家仲間の評判などをダイレクトに伝え、宅配サービスに務めたという。

情報を漏らすこと(公開かもしれない)により読書人を増やし、本の内容にまで注目し、彼ら自身が本の作り手に注文をつける。販路拡大にもなったであろう。

本屋は読んだ当の本人の生の声が聞こえるし、何より読後の気持ちが見えて来る。惣宿老はこんな本が読みたい、こんな本が必要だと言えば希望に近い情報が得られるのだからありがたい。

この時代の商品の流通に果たした商人の役割、客人のほしい物をその手のなかに収めるまでが仕事だと心得た、そんな商人があつてこそ彼ら惣宿老達も専門領域はもとより、良書に出会う機会を多く持ちえたのであろう。

今、私どもの日常は冒頭の例ではないが、ここまでは受付の仕事、以後整理係、その後は調達係、後配送、というように、能率重視で作業を区切り、区切られてきた。そのために買い手側は本当に要求したいものをどこへ持ちかければよいか迷ってしまう。

正直に要求すること、またその真意を汲み取るうとする相互の単純な作業をこの本屋と惣宿老に見て、近世のある時、物を動かしてきたものの内に大きな熱意があつたことを改めて感じたものである。

(たにがわ・やすこ/宝塚の古文書を読む会)

第3回震災復興市民歴史講座に参加して

三原 照雅

私は、仕事から旧家の火災現場に出向くことが多い。そして古文書や書画、骨董などの文化財という貴重な財産が失われていくことを常日頃残念に思っていた。その最たるできごとがあつた「阪神大震災」であつたろう。きっと多くの文化遺産が失われたに違いない。

そのときに敢然と古文書などの救助にあつた人々があつて、なにがしかの貴重な古文書類を救助されたのを知った。非常に立派な得難い活動であつたと思う。そして今回は救助された「笹山家古文書」を解析することによって得られた江戸時代の庶民の学習内容、程度、本の流通状況などが京都橘女子大学教授・横田冬彦氏の解説のもとにわかりやすく紹介された。

予想以上に庶民層の知識、教養程度はたかく、日頃仕事にかまけて無為に過ごし気味の私にとっては少々反省させられる内容であつた。

加えて講演のあとに、阪神間で勉強されている古文書に携わる色々なサークルについての報告が木村修二氏、石川道子氏の両氏から披露された。

古くからある西宮や、救助された「和田家文書」を読もうとして誕生した宝塚にサークルがあるのは知っていたが、ほかにも多々あり、心強く思った。それぞれのサークルで主題に多少の違いはあるのだろうが、今回ここ紅葉の並木道がとても素敵な園田女子大学で初めて一堂に会する機会をつくって頂いたことに感謝したい。

講演会の最後に懇親会まで用意していただき、各サークルの有志が集い、ひととき楽しい語らいができたことは今後の活動にきっと生かされることであろう。どのサークルも悩みは後継者不足が緊急な課題であるようだが当面はサークル間の交流を深め、知恵を出し合い同好の人々を増やす小さな努力が必要だと思ふ。

ゆくゆくは在野の研究者と学校の研究者が一致協調して救助された古文書の解説に取り

組めるようになれば一層学問の発展につながるのではないだろうか。

今後も、「市民歴史講座」として引き続き開催されるとおもうが、息の長い活動になるように関係者の方々に宜しくお願いしたいと思ふ。

(みはら・てるまさ / 伊丹市古文書を読む会)

荒木村重の実像を追う

山本喜與士

天正2年伊丹氏を滅ぼし、伊丹城に入城した荒木村重は、城の名を有岡城と改め、織田信長から摂津の守護として取り立てられました。

そんな村重が、天正6年10月信長に謀反を起こし、天正7年には妻子や家臣を城に残し、有岡城を脱出、尼崎城に移り、毛利方の援軍を待たされたと言われています。

村重の行動には、多くの謎が潜んでいるように思われます。

第一になぜ謀反を起こす必要があつたのでしょうか。どうしても謀反を起こす必要があつたとするならば、なぜ妻子や家臣を城に残して城を脱出しなければならなかつたのでしょうか。

城のどこから抜け出し、どんなルートで尼崎まで行つたのでしょうか。

毛利に援軍を求めたにもかかわらず、援軍が来なかつた背景はどうあつたのでしょうか。など次から次へと謎が出てきます。というのも余りに資料が少なく、これはどの時代に於いても同じでしょうが、破れた側の真実は語られることもなく推測でしか語られていないことに他ならないことでしょう。しかし近年発見された『武功夜話』などで、村重の人間性が少しずつ解きほぐされつつあるようにも思われます。

利休七哲の一人、茶人道薫として一生を終わりますが、こんな謎めいた村重に魅かれ、30年以上も村重と取り組んでこられ、平成14年10月にお亡くなりになつた瓦田昇氏が出版された『荒木村重研究序説』を再読、再々読しながら、瓦田昇氏の遺志を継いで、なん

とか村重の人間性と足跡を探ろうとする思いを同じくするものたちが集まり、平成 11 年 9 月に「荒木村重研究会」が発足しました。

先日の「第 3 回 震災復興 市民講座」に参加させていただき、またワインパーティーでの皆様方との交流で、そのうちに村重に関する資料が発見されることを期待させられた有意義な一日でした。

今後ともよろしくご指導ご鞭撻賜りますようお願いいたします。

(やまもと・きよし / 荒木村重研究会)

古文書を読む会の展望

谷田 寿郎

今回の歴史資料ネットの歴史講座に参加して、古文書の研究活動が、学会の枠を超えて市民の間に広がりを見せていることを、特に、サブ報告である「震災後の市民による古文書を読む会の展開と成果」を聴きながら、その感を深くした。

尼崎市立地域研究史料館を拠点にした「近世古文書を楽しむ会」のグループで取り組まれた町並み絵図の復元作業は、市民に門戸を開いてきた活動の成果であるといえましょう。

文字面を追うだけではなく、足を運んでの実地検証の作業は、歴史研究のあり方を暗に教えていただいたとの思いを抱かせるものでした。西宮古文書を読む会は発足以来の歴史は 20 数年に及ぶとはいえ、寺子屋教育を受ける寺子どまりで、自主的な活動にまで至っていないので、尼崎はもとより、伊丹・宝塚の活動家から学びながら、今後の会のあり方を考えていきたいと思っています。

西宮の場合は発足時から第 3 木曜日の夜の講座という制約もあって、講座のあと、お茶でも飲みながら、会員同士のコミュニケーションが不足していることも、自主的な活動へと飛躍できなかつた原因と反省しています。

話が前後しましたが、横田氏の「江戸時代の書物と読書」の講演も「八尾八左衛門日記」を克明に解説されたうえでの話であった点、江戸時代の庶民の姿が鮮明に浮かび上がってきて興味の尽きない内容でした。

同氏には、かつて「江戸の将軍と摂津の酒」と題した講演を拝聴したことがありましたが、その中でもやはり「河内屋可正旧記」が江戸時代の庶民の飲酒の実態の例証として引用されていたことを思い出しました。

日ごろの研究成果の一端を今後も市民歴史講座の席でご披露いただければ幸いです。横田氏はもちろん、木村・石川の両氏も含めてお願いしたいものです。

(たにだ・ひさお / 西宮古文書を読む会)

史料ネットに望むこと 池田古文書研究会の紹介を兼ねて

富田 允雄

今回歴史資料ネットワークシンポジウムに参加させて頂き、誠に有り難う御座いました。各研究会がそれぞれ長年活動されており、びっくりしました。

池田古文書研究会は、発足して約 4 年になり、13 人程の少数で月 2 回会合を開いています。史料は池田市歴史民俗資料館から黒松家文書のコピーを頂き、全員で解説に励んでいます。

池田村は、江戸時代の初めから酒造・農産物の中継地として町場を形成し、黒松家は、代々北摂の薬の取引、合薬（合わせぐすり）の生産販売をして、江戸後期（弘化以降）には池田村の肝煎・庄屋を勤め、かつ心学の立教舎を開きました。このため文書は多岐に亘り、次の特徴があります。

支配、町村政、年貢（正徳 3 = 1713 ~ 文久 2 年 = 1862 の 160 年間）、人別帳（約 400 余通）

薬の取引、心学関係（これのみ市史史料編 7 巻刊行）

我々の会の運営と問題点を挙げると次のようになります。

我々しろうとの集まりで古文書を解説しているが、歴史的背景が分らず困っていました。最近石川道子先生を迎えて、背景を教わりながら進めています。

池田市公益活動団体として登録し、今年

度僅かの助成金を受けられたので、黒松家文書と解説文を合わせた冊子を手作りする準備をしています。初めてなので、なかなか進みません。

メンバーの高齢化が進み、連れ合いや親の看病の世話のため、長期欠席者が3人もあります。また人集めがなかなか出来ません。

熟練者と新人のレベル差があること、このため新人2名を会合と別に復習時間を設けています。

市歴史民俗資料館、市史編纂所、個人蔵等の史料が多数ありますが、目録化されているのは少なく、また何処にどんな文書があるか分かりませんので、他家の古文書への挑戦が進みません。また熟練メンバーも育成する必要があります。

また上記を踏まえて歴史資料ネットワークへ次の事項を要望します。

各団体が解説文を纏める話が出ていますが、分類などの仕様を統一して、データベース化出来ないか。

各市の資料館の文書の閲覧の開放化の働きかけ（例えば古文書のコピー版を揃えて、目録を作成して頂く）。

古文書の解説・目録作成や写真版のメディア化（国から助成がある）などの作業における行政との協働化の促進。

解説だけでなく、古文書の補修、ワープロ化への技術、冊子の作り方などの勉強会の開催など。

今後とも宜敷お願い致します。

（とみた・みつお / 池田古文書研究会）

第三回市民歴史講座
「市民と深める阪神間の江戸時代史」
に行ってみました・・・

島原 典子

歴史にはまるきり弱い私が、はずみで尼崎古文書を楽しむ会に入会して以来、江戸時代という文字が手招きして誘いかけて来る。

古文書の会の時にいただいた、史料ネットの講演会のチラシを友達に見せたところ、「市民歴史講座って書いてあるけど、市民で

ない人でも行っていいの」

「うーん、いいけど真面目に考えると市外の人は肩身が狭いよね。こんな疑問を持っている者がいるなんて、主催者側は夢にも思っていないよ。それに私なんか古文書をやっていると言うだけで、化石みたいに思われるんよ」

「この前 NHK テレビで、古文書解説の趣味の人のことをやってはったよ。けっこうブームみたい。ええ遊び見つけたやん」

「いやあ、ありがとう」

そのチラシには江戸時代に伊丹で尼崎藩医をしていた家の蔵書の話と、阪神間の古文書の会の様子等ということなので聞いてみたかったが、行けるかどうか案じていた。

でも当日思い切って出かけ滑り込みセーフ、満員の会場に入ると、江戸時代の尼崎の城下町、中在家町町並み絵画の大きいのがドーンと展示され、説明のパネルまであり、この地図の言い出しっぺの私は、気恥ずかしく、他の古文書の会の出版物の展示を見るゆとりもなく、こそこそと席についた。

しかし、手書きの大きな地図の迫力はすごいと再認識。この地図は江戸時代、尼崎市中在家町の干鰯屋（肥料商）で、名主の梶家に伝わってきた二冊で一組の地図だが震災後、尼崎地域研究史料館に寄贈された。幼い頃中在家に住んでいた私は、見やすい一枚の地図にしようと思いたち、古文書仲間の公手博さんに思いを話した。公手さんは八ヶ月間史料館に通いつめ翻刻して完成させたものである。こうして晴れの会場に展示されているのを見ると改めてお礼をいいたい気分がいっぱい。でもこの仕事をしたことにより読解力も、元気もアップ。メデタシ、メデタシ。これが後世に残るように和紙に彩色して立派なものになりたいと夢みている。

この中在家町は大阪城の西の守り、琴浦城（尼崎城）の西側。北筋は中国街道に面し、人馬や象行列も通ったにぎやかな所で南の海岸には魚市場があり、遠く山口県や広島、四国や淡路島からも漁船が入港し、多くの生魚問屋があった。初期の大阪城へは魚飛脚、京都御所へは神崎川を逆上って手繰り船で御用をつとめていた。その他酒造商や廻船業、両替屋等、財をなした者は新田開発、藩札の発行といろいろ多角経営をした。そして

その反映ぶりは貴布祢神社のお祭のだんじりの数でもわかる。家数六百軒余りの町が、だんじり9台、舟だんじり9艘もあったというのだから、町は活気に満ちみちていた。

この地図を寄贈された梶広子さんにお逢いして、家の写真や建図などみせていただいたので建物内部までわかって来て、平面の地図が立体として見えてきた。またこの地図にある酒造業の鉛屋は、昭和十三年頃尼崎に寄付され、琴秋閣として結婚式場として利用されていた。天保十三年に建てられた超一級の美しい町屋と評価され、再建を約束されながらも取りこわされて今はない。せめてコンピューターグラフィック、バーチャル映像でもこの町屋を残したい。また建物内部を覚えている方がいる間になんとかしないと忘れ去られてしまう。皆で手分けし、聞きとりして中在家町の記録を残すため史料ネットの読者の皆さんも助けて・・・。

でもこのメッセージが伝わるかどうかとても心配。私はこの原稿を書くためニュースレターを二、三度読んでみたが、読みにくい。まるで官庁か会社の報告書みたい。やたらと難しい言いまわしや、漢語が多く遊び心がなく一生懸命すぎてシンドイ。途中で投げ出したくなるのは私だけだろうか。

誰かが言われてたが、むづかしい事柄を易しく、やさしい事柄を格調高くと・・・最近のニュースレターはカラー写真もあり人目をひく。字もやや大きくなり、編集のやり方も変わってきたとおみうけした。専門家や読解力のある人だけでなく、素人にもわかりやすくしたら読者も増えるかもしれない。

又しても余計な事を言って脱線、これだからオバサンは嫌われる。ゴメンナサイ。

さて、私が講演会で一番興味をひかれたのは、京都橘女子大学の横田冬彦先生の医者蔵書の話だった。私は先祖の村医者の文書の中で四書、五経、傷寒論などでてくる。又家督分けのところには、儒書、医書、筆紙につくし難く別紙目録とあるが、本がない。なぜだろうと思っていたが先生のお話では医学の本など高く売買されていたと知り、没落した時、売り払われたのだとわかった。

また石川道子さんには、あつかましくも、酒屋の文書のことや調べ方等、たびたび電話

でお教えいただいていたのに初めてお逢いしてとても嬉しく思った。きゃしゃな美人のパワーに感服、益々ファンになった。

その他、各古文書の会の活動報告の中で出版物を出してられること、また宝塚の古文書の会の和田会長の家が宝塚市に寄贈・公開されていると知り、私達の古文書の会のメンバーで見学に行ってお話もおうかがいしたいと話しているところだ。

各地の古文書の会の様子を知ることにより尼崎の史料館の一室でやっている古文書の会の長所は、読む史料はどっさり、調べたい時本や資料はお手のもの、職員もサービス業と心得ていて、とても親切である。古文書を楽しむ会のメンバーもユニークでおもしろい。講演会にいて自分の所属している会の位置づけもやっとわかったというお粗末。

ともすればいねむりしそうな感性を目覚めさせ刺激をうけるいい機会になった。

ところが後日、ちょっとおもしろいことが分かった。大阪教育大の岩城先生が中在家地図をごらんになり教えていただいたことに公手さんとも共、驚いた。

この慶応二年の中在家町の地図は、第二次長州出兵の時、中国街道筋ぞいの中在家町や築地町に兵士達を宿泊させる宿割りのため作られたと考えられるということだった。

以前に公手さんから、史料館からたのまれて早稲田大学の服部文庫の古文書を解読しているときいていた。それは尼崎藩の江戸詰めの儒学者、服部清三郎の書いた文書で、長州出兵の宿泊場所と人数を書いたもので、2000人余りの人が街道筋に泊まっていると聞き、見せてもらおうと思ってはいたが、その史料と中在家地図がセットになって利用されたのだろう。とすると、単なる城下町の地図というより、当時の政治の方向を変えようとする事件の一部にかかわる地図ということになり、より重要なものということになる。

いやいや、またまたおもしろい展開、古文書ってホント、発見があり感激があり、元氣が出て、楽しい。

(しまはら・のりこ

/ 尼崎古文書を楽しむ会)

大阪歴史学会

二〇〇二年度大阪歴史学会 現地見学検討会

「中世・近世の寺内町を考える ー久宝寺・八尾寺内町を中心としてー」

日時：二〇〇三年四月二十日（日）

現地見学 午前一〇時 近鉄八尾駅改札口集合

八尾城推定地（八尾神社） 常光寺 大信寺 八尾寺内町
慈願寺 久宝寺寺内 顕証寺 八尾市まちなみセンター
（少雨決行）

研究報告 午後一時～ 八尾市まちなみセンター

- 1、小谷利明（八尾市立歴史民俗資料館）
「久宝寺・八尾地域における都市形成（仮題）」
- 2、岡田清一（財・八尾市文化財調査研究会）
「久宝寺・八尾寺内町の考古学的調査（仮題）」
- 3、仁木宏（大阪市立大学）
「戦国・織豊期摂津・河内都市論」

パネルディスカッション 小谷利明・岡田清一・仁木宏（ほか交渉中）

参加：自由

資料代：五〇〇円

昼食は各自持参のこと。車でのご来場はご遠慮ください。

神戸大学史学研究会

二〇〇二年度神戸大学史学研究会例会

「歴史における交通と宗教」

三 村 昌 司

来る二〇〇三年一月二六日（日）神戸大学文学部視聴覚教室（一六三教室）において、二〇〇二年度の神戸大学史学研究会例会を「歴史における交通と宗教」というテーマで開催いたします。昨年アメリカ同時多発テロ事件を契機にして、宗教について歴史学の立場から何を考えることができるか、ということ神戸大学史学研究会では議論致して参りました。昨年度は「マイノリティの形成」というテーマで国立民族学博物館の臼杵陽氏に基調講演を頂きましたが、引き続き宗教と歴史の問題を議論していきたい、ということで今回の例会のテーマを設定いたしました。一般に宗教は、民間信仰の形態をとったり、国家による支配の道具であったり、その機能・意

味は非常に様々な形で、時代ごとの特徴をもって現れてきます。つまり宗教のもつ性格・特殊性は、上は国家から下は村落のレベルまで、地域・時代によって多様性をもちます。

日本列島の場合においても、宗教は雑多で、多様なあり方を示します。その中の一つ、神祇祭祀（神祭り）は、権力に利用される一方で、民間のレベルでも信仰対象として存在しています。先述のような宗教の多様性を考える上で重要なひとつの視点になるでしょう。今回の例会では、そのような宗教の多様性を分析する際の鍵として、「交通」という視点を組み込みます。ここでいう交通とは、単なる具体的な通行路の開設等の問題だけに留まりません。人やモノの相互交流、中央と地方、あるいは「中心」と「辺境」との支配・統治構造の問題なども含めて、より広い概念として用います。そうした歴史における「交通」の広がりや展開を考える中で、各時代、各地域の宗教や信仰のもつ意味をみることも、決して無意味な作業ではないと考えます。

このような狙いのもと、本例会では大分大学の市原宏一氏（東欧初期社会史）・坂江渉氏（日本古代史）・横井靖仁氏（日本中世史）の三氏に報告を頂き、活発な議論をする予定です。参加費は無料、事前連絡等も必要ございませんので、お気軽にお越しください。

（みむら・しょうじ / 神戸大学史学研究会委員長）

<< 神戸大学史学研究会二〇〇二年度例会 >>

日時：2003年1月26日（日） 13:00 開場 13:30 開会

場所：神戸大学文学部視聴覚教室（163 教室）

神戸大学人文科学系図書館南の教室（1階）、JR六甲道・阪急六甲駅より神戸市バス36系統「神大文理農学部前」にて下車

報告：市原宏一（大分大学） 「『民族』的危機における社会的結集の一形態
～中世ドイツ人東方植民とスラヴ固有宗教～（仮）」

坂江渉（神戸大学） 「古代のミナトと神祭り（仮）」

横井靖仁（大手前大学） 「起請文の「成立」と神祇（仮）」

神戸史学会

神戸史学会賞は、三木市宝蔵文書調査会に

2003年3月30日（日）贈呈式

大 国 正 美

第24回神戸史学会賞は、三木市宝蔵文書調査会に決定した。2003年3月30日（日）午後2時から三木市末広1丁目6番46号、三木市福祉会館（神戸電鉄三木駅下車、徒歩3分。電話0794 820564）で総会を開催、この会場で贈呈式を行う。当日は調査会設立当初から関わって藤原昭三さんが講演、アトラクションとして三木合戦絵解きを予定している。

受賞理由は、三木市本町の本要寺境内の市宝蔵に保存されている「三木市有宝蔵文書」の長年にわたる解読作業の業績にある。『三木市有宝蔵文書』全8巻は三木市から刊行され、2002年3月完結した。同文書は以前に永島福太郎氏によって分類整理され、1952年に『三木町有古文書』として刊行されたが、多くの未解読の文書が残り、1974年に三木市宝蔵文書調査会を結成し、解読を開始。解読の実務は松村義臣・森下賤男・三浦三次（以上、いずれも故人）・黒田義隆（明石市史編纂のため途中退会）・藤原昭三の5氏が担当した。91年、90%の解読が終わった時点では松村義臣・藤原昭三の両氏のみとなり、両氏の健康上の理由から調査会は休止した。その後三木郷土史の会の協力を得て、三木市が史料集として刊行することになり、92年、三木市と松村義臣・藤原昭三両氏のほか、三木郷土史の会が協議、同会古文書学習会を活用して、三木市有宝蔵

文書調査委員会を結成。進藤輝司（三木郷土史の会幹事）・横山弘（同）の両氏が、実務担当として、校正・編集業務・市役所との調整に奔走した。

（おおくに・まさみ / 史料ネット運営委員）

日本史研究会

「八上城縦走」レポート

川 浪 史 雄

十二月十四日、兵庫県篠山市において「八上城縦走」と題した現地見学会が行われた。八上城は戦国期に波多野氏の居城となった山城であり、市の中心部からやや東に行った高城山（標高459m）の山頂にあった。八上城については、1994年に大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・関西文化財保存協議会・神戸大学史学研究会・日本史研究会・八上城研究会の六団体が合同して保存運動を始め、対策会議を重ね、現在は国史跡指定に向けて活動を行なっているところである。今回の見学会は、この八上城・法光寺城遺跡群保存対策会議の主催で行なわれた。

前日、篠山では雪が降ったという話を聞いたが、当日は比較的気温も上がり良い天気となった。参加者は城郭史の研究者から関西各大学の大学院生まで総勢30名近くが集まった。今回は整備された登山道を登るのではなく、多少の困難が予想されることもあって、市民に向けた広報はなされていない。午前11時、JR篠山口駅からタクシーに分乗してスタート地点へ向かう。八上城跡へ登るには高城山の北の麓から続く登山道を使うのが一般的なようだが、今回は最初に山の南方にある東仙寺跡を見学した後、山の南西から奥谷城跡（波多野氏が丹波に入った時に最初に居城としたとされる所）に登り、そこから八上城跡へ向かい、登山道を下って麓の伝主膳屋敷跡（波多野氏滅亡後に八上に入った大名が居城としたとされる所）へ至るといったルートをとった。

当日は、対策会議のメンバーでもある村田修三・仁木宏両氏が主に講師を務められ、調査成果を報告された。村田氏は一行を先導し、曲輪（くるわ）や竪堀など随所で解説を加えられた。奥谷城跡では仁木氏からも家臣の屋敷や城下町についての報告があった。前述のように奥谷から山頂へはしっかり整備された道がなく、小枝が茂っているような所もあるため、先頭部隊がカメラを払いながらの前進となった。村田氏の解説の時間も含めて1時間半ほどで山頂に到着。少々足元の滑りやすいような所もあったが、歩いた距離自体は大したことなく、あまり山城に登った経験がない私のような者でもわりと楽についていくことができた。本丸跡ではしばし休憩となったが、希望者は村田氏に連れられて周辺の曲輪跡にも行く事になったので私もついて行き、右衛門丸跡に石垣が残っているのを見せてもらった。その後本丸跡を出発し、尾根づたいに移動してから下山、伝主膳屋敷跡周辺を見学した後に解散となった。

私は今年度から神戸大学史学研究会の担当者として対策会議に出席しているが、これまで実際に八上城に行ったことはなかったので、今回こうして講師の先生方のお話をお聞きしながら現地を歩くという機会が持ててよかったと思う。また、このような見学会を開催できたことで、参加者の皆さんも保存運動・調査ともに順調に進んでいることを実感できたのではないかと思う。

（かわなみ・ふみお / 神戸大学大学院文学研究科院生）

富松城跡を活かすまちづくり委員会

「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」開催される

辻川 敦

富松城跡は、尼崎市富松町に残る貴重な中世城郭遺構である。この遺構は、立地している土地の相続に際して国税庁に物納されたことから、現在は財務省の管理下であり、競売にかけられ失われてしまう可能性がある。これについて、地元住民の皆さんによる「富松城跡を活かすまちづくり委員会」が本年（2002年）1月26日に発足し、3月30日と6月8日にそれぞれ参加者180人、380人という大規模な学習シンポジウムを成功させるなど、保存とまちづくりへの活用をめざす旺盛な取り組みを進めてきている。その具体的な取り組み内容については、すでに既刊の本“News Letter”において紹介してきたところである。

「まちづくり委員会」は、6月のシンポ開催後も、7月21日には児童・生徒を対象とした「富松一夜城体験学習会」を開催（300人参加）、10月6日の尼崎市民祭りパレードには、地元メンバー70人が仮装し富松城跡をアピールしつつ参加するなど、活発に取り組んでいる。

こういった一連の取り組みの、いわば2002年における集大成として実施されたのが、11月28日（木）から12月1日（日）にかけての「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」であった。富松神社参集殿において開かれたこの展示会は、富松城跡に関心を寄せる地元の皆さんをはじめ、各地の歴史ファンや城郭研究者などを集め、新聞各紙も取り上げ報道するなど話題を呼んだ。4日間の来場者は、合計692人におよんだ。

同委員会が開催した展示会の概要は、次のとおりである。



「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」

開催趣旨 富松城跡は、西摂（摂津国西部）の中世史を語る上にも、また、現存する平野部の中世城館跡の特徴をよく残した貴重な文化遺産であることが、多くの専門家から指摘されています。

そこで、尼崎の宝・富松城跡の歴史や文化財価値を分かりやすく展示するとともに、富松城の全貌に迫り、富松城跡を次世代に残す必要性を広く市内外に情報発信し「地域の歴史遺産を活かした、誇りの持てるまちづくり」を考える一助とし、また、市民・関係者に理解と協力を得ることを目的に開催しました。

期間 平成14年11月28日（木）～12月1日（日） 4日間

会場 富松神社 参集殿

参加料 無 料

主催 富松城跡を活かすまちづくり委員会（代表 善見壽男）

後援 尼崎市、尼崎市教育委員会、大阪歴史学会、歴史資料ネットワーク、御土居堀研究会、城郭談話会、神戸史学会、土壘サミット、尼崎郷土史研究会、荒木村重研究会

協賛 (財)尼信地域振興財団

おもな展示内容と特色

(1)富松城遺跡の発掘出土品をはじめ一堂に公開。

- 出土品 69 点、発掘調査地点位置図、発掘調査説明パネル。
- (2) 富松城に関する実物文献史料、刊本、関連書籍、論文等。
 - (3) 兵庫県南部から大阪府にかけての残存平地中世城跡位置図パネル。
 - (4) 富松城跡周辺立体復元模型、富松原風景イラストマップ、西摂合戦布陣図。
 - (5) 富松城跡の「昔と今」写真展示。
 - (6) 古地図、航空写真で見る富松城跡周辺のうつり変わり。

展示説明会 11月30日(土)

午後2時より 文献・出土品解説

楞野(かどの)一裕氏、岡田務氏(いずれも尼崎市教委学芸員)

午後3時より 「富松の原風景をめぐるお話し会」

井上真理子氏(尼崎探訪家、原風景マップの作成者)

川口宏海氏(大手前大学教授、中世・近世考古学)



これら展示企画準備にあたって、まちづくり委員会は11月に入ってから数度にわたって実行委員会を開催し、あるいは準備作業を行なった。これらの主体となったのは、まちづくり委員会代表の善見壽男氏(富松神社宮司)をはじめ、委員会を構成する数十人の地元メンバーである。氏子会、青年会、商店会など、地元のさまざまな団体が、それぞれ分担して展示会開催にあたっており、その取り組みの蓄積と組織力があってこそ、短期間でこういった本格的な展示会が実現し、成功をおさめたと言える。

同時にこの企画には、後援団体に名を連ねているさまざまな公的機関や歴史研究団体、あるいはその職員や構成メンバーが参加し、協力していることも見逃せない。さきにあげた展示内容のうち、(1)の発掘関係と(2)の文献展示は尼崎市教委の歴博・文化財担当が全面的に用意し、展示物も同課と市地域研究史料館が貸し出した。また、(3)の位置図パネルを山上雅弘氏(城郭談話会、県埋蔵文化財調査事務所)が作成したのをはじめ、(4)以下の諸展示物作成にあたっては、山上氏や川口宏海氏(大手前大学、大阪歴史学会)らが全面的に協力した。開催前、二度にわたる夜間の準備打ち合わせには、これら専門家グループとも言うべきサポートメンバーが集まり、地元まちづくり委員会のメンバーとともに展示企画に関する意見をかわした。

史料ネットからは、神戸大学の市澤哲氏がこの準備打ち合わせに参加し、森田竜雄氏とともに展示準備作業に協力した。具体的には、西摂合戦布陣図の作成および、文献展示解説原稿の一部作成などを担当した。

こういった多くのメンバー、協力者の存在があって、冒頭でもふれたようにわずか4日間の展示会ではあったが、参加者692人と成功裏に企画を終えることができた。開催期間中には、さきの尼崎市長選挙で圧倒的有利と見られていた現職を破って当選したばかりの、市長就任を前にした白井文氏も来場し、善見氏はじめ当日会場に詰めていたメンバーを驚かす一幕もあったようである。

なお、まちづくり委員会では、今回の展示会の内容をインターネット上で再現するバーチャル展示を計画しており、そのコンテンツ構築作業について、史料ネットに対して協力要請があった。これを受けて、おりしも神戸大学が地域貢献特別支援事業を今年度実施することから、その一環としてさきの市澤氏、森田氏はじめ、神戸大学のメンバーがこの作業にあっている。2003年3月までに作業を終え、「富松城跡を活かすまちづくり委員会」のホームページにバーチャル展示が

実現する予定であるので、展示会に足を運ぶことのできなかつた方々も、ぜひこのサイトをご覧いただければと考えている。

展示会参加者の感想から＝まちづくり委員会ホームページより

・ 地域への興味から今日展示会に参加させていただきました。寄せていただいたのが終了間際の時間帯だったのにもかかわらずあまりの盛況ぶりに、いろんなヒトの富松城に対する熱意のほどが伝わってきて、私もいろいろ勉強になりました。幼少時代からすごしてきたこの地域の歴史を語る上において、貴重な文化財が失われるかもしれないというこの危機的現状から、少しでも多くの方に富松城跡の重要性を知ってもらえたらと思います。展示会は明日一日で終了ですが、今後とも頑張ってください。



・ 知らずに富松城展をのぞいてみました。午後2時過ぎでしたでしょうか。幸い展示品の説明会が行われており、良くわかりました。それにもまして会場がいっぱいなのに驚きました。近くに住んでおきながら地域の歴史を知らなかった自分が恥ずかしい思いでした。なんだか尼崎に住んでいることが誇らしく思えました。参加された方々はどんな印象を持たれたのかわかりませんが、私にはなんといい1日であったと思っています。こんないい機会を作っていただいた皆さんに感謝します。

・ 富松城展にスタッフとして参加する事ができ今充実感で一杯です。前日夜遅くまでウレタン版を切ったり張ったりと、作業が続きましたが疲れなから不思議です。気の合う仲間達、そしてなによりも善見さんの人柄の良さがこの展示会の成功へとつながったのではないのでしょうか。遠方よりお越し下さった方々、久しぶりに出会った同級生、地元の方々、おいで下さった全ての方々どうもありがとうございました。また富松においでくださいね。大きな楠からの爽やかな風があなたをお待ちしています。

・ 12月1日の日曜日午後になって家を出たこともあって、用事を済ましたあと、富松神社に着いたのは午後3時ごろになってしまいました。残念です。主催者の皆さんが、手際よく後片付けの真っ最中でした。会場の内でも外でも大勢の方が作業されていて、こんなに多くの人たちが準備されていたんだと推測しました。展示会は見れなかったけど、いいものを見せてもらったと一人思っています。HPにバーチャル富松城展があると知って楽しみにしています。よろしくお願いします。

・ 新聞で富松城跡を知りました。私は不動産会社に勤めています。業界の通例では売り手と買い手の仲介をするのが仕事ですが、業界のモラルとして、遺跡を売買取引の対象とするのは間違っていると思います。また、文化の保存にはお金がいるのではないのでしょうか？募金活動の計画はないのでしょうか？寄付の必要があれば、微力ですがしたいと思っています。何だかわからないけど応援したい気分になっています。ガンバレ富松城！

(つじかわ・あつし/史料ネット運営委員)

第1回・兵庫津研究会サブ学習会

藤田明良

2年前に発足した兵庫津研究会は、兵庫津を核とした地域史の再構築をめざして研究交流をおこなってきたが、このたび、サブ学習会を始めることになった。これは今年度から3年間の予定で始まった科学研究費補助金による共同研究と連携して、より専門的な研鑽をおこなうことを目的としている。その第1回が12月25日(水)13:00~17:00に、神戸市立兵庫勤労市民センター第一会議室で行なわれた。今回のテーマは、「中世禅宗と港町・守護権力」で伊藤幸司氏(日本学術振興会特別研究員)の「大阪湾の禅寺と対外交流」と上田純一氏(京都府立大学教授)「赤松氏の禅宗受容について」の二報告があった。伊藤報告は、鎌倉期~室町前期に創建された兵庫と堺・博多の禅宗寺院を、門派ごとに整理し、円爾を派祖とする聖一派(博多・堺)、南浦紹明を祖とする大応派(堺・博多・兵庫)、約翁徳俣を祖とする大覚派(兵庫)など、室町期に幕府と結びつき五山を管轄した夢窓派(夢窓疎石・絶海中津など)と異なる門派が、国際交流の窓口をおさえていたことを指摘した。さらに、そのような門派が京都~瀬戸内~九州に寺院や子院を展開して横断的なネットワークを形成していたこと、各ネットワークが中国にまで連なり、禅僧の交流や貿易にいかされていたことなどを述べた。上田報告は、破庵派vs松源派+大慧派という対立と、前者から後者への主力交替という13世紀~14世紀の中国禅宗界の動向を述べ、大応派や大覚派が国際交流で頭角をあらわすのは、彼らに連なる松源派の台頭と関わりがあることを指摘した。さらに赤松氏が、播磨で隆盛していた聖一派でなく、一山派の雪村友梅を受容したのは、一山派と松源派・大慧派と親交関係や友梅の国際的経歴や人脈に着目したものであり、中国禅宗界の動向に敏感に反応したものだだったと論じた。その後の議論では、中世禅宗の門派の性格や特質、元代と明代における禅宗の政治的位置付けの相違、日本や朝鮮など周縁諸国における受容のあり方などをめぐって、活発な質疑と議論がなされた。当日は18名の参加者があり、とくに京阪神の大学院生が多かった。サブ学習会は、再来年度までを目安に年に数回開催していく予定。次回は3月に関銭台帳に関する最新の成果について、勉強する予定である。

(ふじた・あきよし/天理大学助教授・史料ネット事務局長)

西撮研究会

中村光夫

1999年(平成11)2月に尼崎で研究会「西撮地域近世史研究の課題」が開催されました。この研究会は、同年10月に堺市で開かれた地方史研究協議会第50回大会の準備研究会の一つとして企画され、横田冬彦氏の司会、岩城卓二・大国正美・石川道子・奥村弘の四氏をパネラーとする、パネルディスカッションが行なわれました(ディスカッションの記録は、尼崎市立地域研究史料館編『地域史研究』29-2、2000年2月刊、に掲載)。

横田氏は当日のテーマである西撮地域近世史研究のキーワードを「非領国論」と捉え、約40人の参加を得て行なわれた議論は「非領国研究の水準を完全に一段階引き上げた」と評価されています。そのうえで、残された問題は非常に多いが、研究推進のためには史料の発掘・保存、史

料情報の公開も含めて自治体の枠 自治体単位に進められる史料の調査・保存事業・修史事業の枠組 を越えた取り組みが必要、と総括されました。

上記のような議論を受けて、西摂地域の近世・近代の歴史に関心を持つ者同士が、各人の研究成果や史料情報の共有化を図ろうと、1999年12月に西摂研究会をスタートしました。1~3か月ごとに地域研究史料館に集まり、2002年10月で14回を数えています。

報告テーマは、畿内近国における譜代大名の問題、新出「服部文庫」史料による尼崎藩研究、歴史地理学・考古学・文献史学など多方面からの兵庫津の解明、摂河泉播にわたる旗本領の地方代官、関西・関東にまたがる旗本知行所、大工組や手伝職仲間など職人組織・奉公人、在方酒造業等々です。対象地域が広域にわたっている報告、あるいは研究課題が今後の広域的・学際的研究を内包しているなど、研究会の特徴が良く発揮されています。

〔参考〕河野未央「研究会報告 西摂研究会」『地域史研究』32-1、2002年10月刊

(2002.12.15稿)

次回第15回研究会予告

日 時：2003年2月1日(土)午前10時から

報 告：岩城卓二氏、河野未央氏、尼崎の近世古文書を楽しむ会会員ほか
「尼崎城下中在家町絵図の復原とデジタルデータ化」

場 所：尼崎市立地域研究史料館 (TEL.06-6482-5246)

申込み：当日、会場へ

(なかむら・みつお / 尼崎市立地域研究史料館)

神戸都市史研究会の発足

河 島 真

2002年6月から神戸大学を主な会場として、神戸都市史研究会の活動が始まりました。この研究会は、近代都市形成史論の視点から西摂港湾都市神戸の近代化を照射し、そこで浮き彫りとなった西摂港湾都市神戸の近代化像を手がかりとして近代都市形成史論の再構築を試みようとするものであり、同時にこの試みを通して歴史研究におけるエリア・スタディーズに新しい機軸を打ち立てることを目標としています。

2002年末までの活動は次の通りです(報告の副題は省略)。

6月21日 準備会(神戸都市史研究会の趣旨と運営方針を検討)

7月26日 森本 米紀(神戸大学院生)「1920年代『都市計画』の展開」
尾崎 耕司(大手前大学教員)「神戸市における衛生組合について」

9月20日 布川 弘(広島大学教員)「都市化と都市問題の成立」

12月16日 人見佐知子(神戸大学院生)「『芸娼妓解放令』と近代公娼制度の成立」

森本報告は1920年代神戸の都市計画における受益者負担問題の分析を通して、尾崎報告は明治中・後期の神戸における衛生組合の分析を通して、それぞれ近代神戸の都市社会構造及び都市政治構造を明らかにしようとするものでした。また布川報告は18世紀後半から21世紀初頭までを射程に近代都市と都市問題の形成を「都市民」の視角から捉え直し、人見報告は「芸娼妓解放

令」(明治5年)制定過程の分析を通して日本の近代化と公娼制度の「制度化」との関わりを都市史論の視点から解明しようとするものでした。

今後は、近代都市形成史論の再構築を視野に、さらに対象時期を広げ、近代神戸の史料所在についての情報交換を行いながら、その政治史的・社会史的分析を進めてゆく予定です。なお、この研究会は科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))による研究「国家的港湾都市域としての西摂地域形成過程の研究」の一環として行われています。

(かわしま・まこと / 神戸大学文学部講師)

文献情報

書名	編著者	出版者	出版年
現代社会における「災害文化」形成についての方法論的研究 平成13年度神戸大学教育・研究重点支援経費研究成果報告書	研究代表 岩崎信彦	神戸大学文学部	2002/03
阪神・淡路大震災復興誌 第6巻 2000年度版	震災復興誌編集委員会	阪神・淡路大震災記念協会	2002/03/31

論文等表題	筆者(著者)	誌名(書名)	巻号	発行年月日
阪神・淡路大震災の資料保存と記録化に関する研究会のまとめ		『現代社会における「災害文化」形成についての方法論的研究』		2002/03/
鳥取県西部地震後の史料保全活動と今後の課題	小林 准士	『歴史科学』	169	2002/06/01
芸予地震と愛媛資料ネットの活動	寺内 浩	『歴史科学』	169	2002/06/01
歴史資料ネットワークの改組について	大阪歴史学会企画委員会	『ヒストリア』	180	2002/06/30
歴史資料ネットワークの新たな活動について	大阪歴史学会企画委員会	『ヒストリア』	182	2002/11/10
被災史料救出活動の新展開	佐賀 朝	『歴史評論』	633	2003/01/01
歴史資料ネットワークの活動の展開と課題	藤田 明良	『歴史評論』	633	2003/01/01
山陰史料ネットの活動について	小林 准士	『歴史評論』	633	2003/01/01
愛媛資料ネットの活動と今後の課題	寺内 浩	『歴史評論』	633	2003/01/01
発言 - 災害と歴史資料によせて	保坂 裕興	『歴史評論』	633	2003/01/01

活動日誌

2002. 4. 15 第 91 回阪神大震災歴史学会連絡会運営委員会
 2002. 5. 8 ニュースレター28号発行
 2002. 5. 11 第 11 回「西摂研究会」
 2002. 5. 13 第 92 回阪神大震災歴史学会連絡会運営委員会
 2002. 5. 24 ニュースレター改組特別号発行
 2002. 5. 26 総会とシンポジウム「災害と歴史資料」を開催。 歴史資料ネットワーク改組
 2002. 6. 8 第 2 回「富松城跡学習シンポジウム」を後援
 2002. 6. 10 第 1 回歴史資料ネットワーク運営委員会
 2002. 6. 12 2002 年度震災救出史料整理準備・説明会
 2002. 6. 16 第 1 回震災復興市民歴史講座「震災後の発掘成果で変わる古代史像」を開催
 2002. 7. 8 第 2 回歴史資料ネットワーク運営委員会
 2002. 7. 14 震災救出史料整理（於神戸大学古文書室）
 2002. 7. 21 あおぞら財団シンポジウム「公害・環境問題資料の保存・活用ネットワークをめざして」を後援
 2002. 7. 27 第 12 回「西摂研究会」
 2002. 8. 3, 6 第 4 回「火垂るの墓を歩く会」を後援
 2002. 8. 30 第 3 回歴史資料ネットワーク運営委員会
 2002. 9. 2 ニュースレター29号発行
 2002. 9. 7 震災救出史料整理（於神戸大学古文書室）
 2002. 9. 20 第 2 回「神戸都市史研究会」
 2002. 9. 30 第 4 回歴史資料ネットワーク運営委員会
 2002. 10. 6 第 2 回震災復興市民歴史講座「よみがえれ、兵庫の中世」を開催
 2002. 10. 12 第 13 回「西摂研究会」
 2002. 10. 26 震災救出史料整理（於神戸大学古文書室）
 2002. 11. 3, 4 震度 5 の地域（宮城沖・日向灘沖）に住む史料ネット会員にお見舞いメール送信、被害状況を確認
 2002. 11. 5 第 5 回歴史資料ネットワーク運営委員会、ニュースレター30号発行
 2002. 11. 10 第 3 回震災復興市民歴史講座「市民と深める阪神間の江戸時代史」を開催
 2002. 11. 16 震災救出史料整理（於神戸大学古文書室）
 2002. 11. 18 震災救出史料の 4 箱分を神戸女子大学今井研究室に移管、整理を依頼
 2002. 11. 28 「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」を後援
 2002. 12. 9 第 6 回歴史資料ネットワーク運営委員会
 2002. 12. 15 震災救出史料整理（於神戸大学古文書室）
 2002. 12. 16 第 3 回「都市史研究会」
 2002. 12. 25 第 1 回「兵庫津研究会」サブ学習会
 2003. 1. 8 ニュースレター31号発行

2001 年度以前の活動日誌については、史料ネットのホームページで掲載しています。

(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/nissi.htm>)



第 3 回震災復興市民歴史講座

<<編集後記>>

今号は盛会だった講座の熱気そのままに伝わる豊かな内容



です。

これからも、皆様方の日々の活動内容など、原稿がございましたらどしどしお寄せ下さい、少しでも楽しいニュースレターになればと思います（橋本唯子）

個人会員への入会 “News Letter” 購読のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”を年4回発行いたします（年間購読料：郵送費込み1000円）。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。また、贈呈読者の皆さまには是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員5000円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（1口3000円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット郵便振替口座

名義 歴史資料ネットワーク 口座番号 00930-1-53945

史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。

<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>

または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No.31・・・2003.1.8（水）

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565

e-mail s-net@lit.kobe-u.ac.jp

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/welcome.html>